

巻 頭 言

井 戸 の 底 か ら

岩 瀬 慶 三*



つい先達のことでしたが、陋屋の樋がいたんだので取り換えようと思いましたが、樋屋の小僧さんから、ドブ漬けと電気メッキの得失について、その製造方法にまで溯ってながながと講釈を聞かされましたが、よくもこのような末端の者にまで知れわたっているものだと、つくづく感心させられました。閑話休題。

わが国の鉄鋼業が今日のように素晴らしく強大になるとは、戦後は勿論、戦前においてすらも、想像もつかなかったことである。これがさらにこの先 30 年の間に、どのような姿になってゆくものであるかと想像してみることは、胸のおどる思いを禁じ得ない。

われわれ鉄鋼協会々員の末席に連らなっているものとしては、わが国鉄鋼業今日の隆盛に、われわれも一役買っているのではなかろうかという錯覚におちいりやすいのであるが、わたくしはわが国鉄鋼技術の優秀性が今日の盛大を来たした原因であるとは考え度くない。優秀技術そのものよりも、これを活かしている人にあると云い度い。現在経営の陣頭に立っている鉄鋼技術者の優秀性をわたくしは買い度いのである。

技術者が優秀であればこそ、優秀な技術が生れるのであるが、単なる優秀技術の集積のみによって今日の如き強大な鉄鋼業の姿が生れるものではない。優秀なる技術者は初期には技術者かたぎに徹して、技をみがき、しかも技術者オンリーに墮することなく、やがてはその総合に留意するようになり、ついには経営に不動の発言をなすに至る。今日わが国の鉄鋼業を動かしているのはこのような人達であり、そこにまた将来の明るさが感じられるのである。

しかしながら、今日の優秀技術者必ずしも明日の優秀技術者たる保証はない、況んや経営者が、もしも、今日の隆盛の上にあぐらをかくが如きことあっては、それこそ大変である。

いうまでもなく、一国の鉄鋼業というものは、すべての産業の基幹であって、鉄鋼業のためのみの鉄鋼業であっては、その存在意義は著しく低下する。資源少なく、膨大な人口をかかえているわが国においては殊に然りである。今日におけるわが国各種産業の発展は実にめざましく、世界の驚異とせられ、西独を凌駕せんとしつつあるのであるが、鉄鋼の国内価格が輸出価格を上廻っていてさえも、この勢いである。もしもこれが逆になった場合の、わが国各種産業の発展振りは、想像するだに武者振いを禁じ得ないのではあるまいか。

わたくしの夢みているわが国鉄鋼業の 30 年後のあり方は以上のようなものであり、これはまた、技

* 東北大学名誉教授、粉末冶金技術協会々長

術出身の経営者の究極の理想でもあると信じられるから、どのような困難があろうとも、優秀なる技術者と力を併せて、理想実現に邁進して頂き度いものである。

基幹産業としての鉄鋼業は、今日よりもさらにさらに強大化して、国際的にも超一流の域に達し、ある種の国家統制の下におかれる運命にあると考えられる。そこに達する道筋においては、資本主義的様相を極度に発揮し、系列化は強化せられ、激しい自由競争時代となり、事業としての妙味も絶頂に達するであろう。

以上のように、わたくしは現在のわが国の鉄鋼業界すなわち冶金技術者に対して絶大の礼讃を惜しまないものであり、その将来に多大の望みを属しているのであるが、それがゆえにこそ、ここに聞いて頂き度いことがある。

そもそも冶金技術とは何かということである。冶金工学が今日立派な独立した科学技術であることは何等疑問をさしはさむ余地はないが、それは他の工学を巧みに消化して自分のものとした結果である。殊に最近では機械工学、電気、電子工学の粋を取り入れることによって素晴らしい発展をしているが、これらは製造冶金的の部分が多く、製錬そのものに関しては、空気の代わりに酸素を用いたこと以外には殆んど目新しいものがない。これが唯一の改善であるが、これでは余りにも化学的にプリミチブである。冶金の基礎は化学である以上、化学工学今日の進歩を採り入れる必要があるのではあるまいか。この事に関してわたくしは硫安工業と製鉄工業との結びつきが具体化されつつあることに多大の希望を抱くものである。

粉鉱石の前処理にしても、熔鉱炉のチャージの内容に関しても、あるいはまた、粘結炭やコークス炉の問題にしても、化学工業との結びつきを強化することによって、その様相が一変し、より合理化されるのではあるまいかという考えを捨て去ることが出来ない。

“餅は餅屋”でもあり、“岡目八目”でもある。